

'14

前期日程

国語小論文問題

(教育学部)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は六ページです。問題に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合には申し出てください。
3. 解答には黒鉛筆を使用してください。
4. 文字ははっきりと正確に記入してください。
5. 解答は答案用紙(一)(二)の所定の欄に記入してください。
6. 受験番号を各答案用紙の所定の欄に記入してください。
7. 問題冊子のこのページにも受験番号を記入してください。
8. 退室するときは、答案用紙を(一)(二)の順に重ね、全体を裏返して、机上においてください。
9. 答案用紙を持ち帰ってはいけません。
10. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

受	験	番	号
見本			

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「対話的な精神」とは、異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを潔しとする態度のことである。あるいは、できることなら、異なる価値観を持った人と出会って議論を重ねたことで、自分の考えが変わっていくことに喜びさえも見いだす態度だと言ってもいい。

ヨーロッパで仕事をしていると、些細なことでも、とにかくやたらと議論になる。議論をすること自体が楽しいのだろうかと思えないときも往々にしてある。

三〇分ほどの議論を経て、しかし、たいてい日本人の私(A)の方が計画的だから、その「対話」の結末は、Cというよりは、当初の私の意見に近い「A」のようなものになる。そこで私が、「これって結局、最初にオレが言っていたのと、ほとんど変わらないじゃないか」と言うと、議論の相手方(B)は必ず、「いや、これは二人で出した結論だ」と言ってくる。だが、この三〇分が、彼らにとっては大切なのだ。

とことん話しあい、二人で結論を出すことが、何よりも重要なプロセスなのだ。

幾多の(おそらく私よりも明らかに才能のある)芸術家たちが海外に出て行って、しかし必ずしもその才能を伸ばせないのは、おそらくこの対話の時間に耐えられなかったのではないかと私は推測している。様々な舞台芸術の国際協働作業の失敗例を見ていくと、日本の多くの芸術家は、この時間に耐えられず、あきらめるか切れるかしてしまうのだ。日本型のコミュニケーションションだけに慣れてしまっていると、海外での対話の時間に耐えきれずに、「何でわからないんだ」と切れるか、「どうせ、わからないだろう」とあきらめてしまう。演劇に限らず、音楽、美術など、どのジャンルにおいても海外で成功している芸術家の共通点は、粘り強く相手に説明することをいとわないうところにあるように思う。日本では説明しなくてもわかってもらえる事柄を、その虚しさに耐えて説明する能力が要求される。

私はこの能力を、「対話の基礎体力」と呼んでいる。そして、小中学校の先生方には、「対話の技術は大学や大学院でも身につきますから、どうか子どもたちには、この『対話の基礎体力』をつけてあげてください」とお願いしてきた。

異なる価値観と出くわしたときに、物怖じせず、卑屈にも尊大にもならず、粘り強く共有できる部分を見つけ出していくこと。ただそれは、単に教え込めばいいということではなく、おそらく、そうした対話を繰り返すことで出会える喜びも、伝えていかなければならないだろう。

意見が変わることは恥ずかしいことではない。いや、そこには、新しい発見や出会いの喜びさえある。その小さな喜びの体験を、少しずつ子どもたちに味わわせていく以外に、対話の基礎体力を身につける近道はない。

(平田オリザ『わかりあえないことから』より ただし一部改変がある)

問 傍線部「その小さな喜びの体験」について、学校生活でこのような体験を子どもに味わわせるためには何が必要か。根拠を明らかにしながらあなたの考えを述べなさい。(八〇〇字以内)

次の文章を読んで後の間に答えなさい。

花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものかは。

雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方も知らぬも、なほあはれに、なさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の事書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「障る事ありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことに頑なる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる。——中略——

すべて、月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家に立ち去らでも、月の夜は聞ねのうちながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り、あからめせずまほりて、酒飲み、連歌して、はては大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪には降り立ちて跡付けなど、よろづの物、よそながら見ることなし。

(注) 歌の事書……和歌が詠まれる場を説明する、和歌の前についた詞書ことばがき。

よき人……趣味がよく、教養のある王朝貴族文化を体現した人物。その反対が「片田舎の人」や「頑なる人」。

『徒然草』を記した十四世紀前半歌人・隠者である兼好法師（一二八三年頃—一三三二年以降）もどうやら現物の花や月（ともに古典において美しい風景の代表です）よりも、記憶や回想における花や月を尊んでいるタイプの人間であったようです。だが、こういう人物は、通常、簡単に言くと、素直でない人と映るでしょう。だから、近世の本居宣長は、兼好のことを「つくり風流みやび」と言つて批判しました。古代人の汚れない清純な心（これは宣長の考えですが、むしろ事実ではなく、宣長の願望です）を最も尊んだ宣長の目から見れば、現物よりも記憶を重視する兼好の美的鑑賞態度は屈折した心根そのものであり、到底許しがたいものだったからです。

たしかに、冒頭に記される「花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方も知らぬも、なほあはれに、なさけ深し」という文章は、一見すると、素直ではないし、屈折しているように見えます。なにしろ、桜は満開で、月は一点のかげりのないのだけを見るものではないと言っているからです。人間なら誰しも（現代では花見・月見に価値を置かない向きもあるやと思われませんが、それはともかく）花なら満開の桜が見たいし、お月様は、吸い込まれるようなまん丸い満月を拝みたいと思うでしょう。だから、宣長の批判は外はずれているわけではありません。

しかし、兼好が言いたいことは宣長の批判とは一味違ふ次元にあるのです。まず、いつの世にもいる俗物を排除したいという狙いが見えます。

ことに頑ななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる。

片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のものには、ねぢ寄り、あからめもせずまぼりて、酒飲み、連歌して、はては大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪には降り立ちて跡付けなど、よろづの物、よそながら見ることなし。

この二つの文章は、「頑ななる人」（万事につけて頑迷な人のことでしょう）と「片田舎の人」（これは説明は不要ですね）の生態度が底意地悪く描写されています。「頑ななる人」は満開の桜しか興味を持たず、「片田舎の人」は、桜の枝を折ったり、泉に手足をつけたり、雪に降り立って足跡をつけたりします。これらの行為は、兼好に言わせれば、俗悪の極みであって、許すことができないものでした。彼らの特質を兼好は「よろづの物、よそながら見ることなし」とさりげなく言っています。「よそながら見る」とは、やや距離を置いて、即物的に見ないことです。何であれ、よいとされる物そのもの（この場合は、満開の桜）にしか関心がないばかりか、「枝を折る」などといった心ない行為をする人間を兼好は「頑ななる人」や「片田舎の

人」とこき下ろしているのです。このような人は、現代風に言えば、「ウザい奴」ということになるのかもしれない。要するにかっこよくないのです。

だが、兼好は、俗物・田舎者批判のためだけに、わざわざ逆説的な言葉を弄しただけではありません。

雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方も知らぬも、なほあはれに、なさけ深し。

春は家に立ち去らでも、月の夜は聞のうちながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。

という文章がありますが、これらの内容を少し説明しましょう。

「雨に向かひて月を恋ひ」とは、雨のために実際には目に見えぬ月を恋慕うことであり、「垂れこめて春の行方も知らぬ」とは、「春の行方」が意味する核が咲きはじめて散るまでの時間の流れを家の中に閉じこもっていて、想像することを言っています。次の「春は家に立ち去らでも」は「垂れこめて」と同様ですが、「月の夜は聞のうちながらも思へる」とは、寝床で見えない月を想像することです。つまり、月や花を現実には見ないで、想像することの方が、「あはれになさけ深し」いし、「いとたのもしう、をかし」いと言っているのです。

それでは、どうして実際に見ることよりも、想像する方が美や風情があるのでしょうか。

現代人は、想像といえは、未知なるものについての思いや、自分勝手な空想（妄想か）だと考えがちです。前近代社会が昔に価値を置いているのに対して、近代以降の社会は未来に価値を置きますから、どうしても想像は未知なるものに向かつてしまいます。しかし、兼好の時代、想像とは、未知なるものや未来を思い浮かべるものではありません。過去を想像するので、どうやって、過去を想像するのか。その過去も自分の個人的な過去や教科書で習う歴史のようなものではないことを最初に押さえておいてください。ここで言う過去とは、古典に書き遺された言葉のことなのです。

兼好が生きた時代である中世の文化の中心は和歌でした。貴族（公家）も僧侶（寺家）も、そして武士（武家）も和歌を詠むのです。和歌は、実際に見た風景など詠みません。古い歌（古歌といいますが）の言葉を新たに組みなおして和歌に仕立て上げるのです。これはもう『古今集』の時代からその傾向がありました。中世に入ってから、ほぼそうになりました。つまり、現実の風景よりも和歌で詠まれた幻想の風景の方が、彼らにとっては価値があり、リアルなものだったということです。そう考えてみると、兼好が想像というよりも記憶にある美や風情を実際に見えるものよりも上においたことが分かってくるでしょう。だから、兼好の考え方は、別段、「つくり風流」でも屈折した心根でもなんでもありません。古典世界における正統的な美の享受のありようと言ってもよいでしょう。

（『高校生からの古典読本』より 前田雅之「何が『イケ』てる？」ただし一部改変がある）

問 傍線部「兼好が言いたいこと」の内容を明らかにしつつ、そういう考え方の持つ功罪両面について、あなたの考えを述べなさい。（四〇〇字以内）